

急がれるアメリカザリガニ対策

：水生昆虫への影響と対策

神奈川県立生命の星・地球博物館博物館

苅部 治紀

アメリカザリガニの在来生態系への影響は、近年になって研究者の認知度は上がってきているが、一般にはこの問題の深刻さはなかなか浸透していないのが実情と思われる。今回は、演者らの収集した知見から、本種の個体群大爆発がキーとなって絶滅危惧種の水生昆虫類に壊滅的な打撃を与え、多くは地域絶滅に至った事例を中心に紹介する。

これらは、演者らがこの問題に気が付き情報収集を開始した、おもに 2000 年代半ば以降からのものであるがその中だけでもベッコウトンボ、シャープゲンゴロウモドキなどの種の保存法指定種の絶滅要因になった事例が複数存在する。おそらく本種の戦後の爆発的な全国への拡散時期には、多大な影響を与えたことは容易に推察されるが、これは文献上にはほとんど残っていない。

さらに演者がかかわっている保全地域での根絶成功事例と低密度管理の成功事例、それに伴う水生生物の回復事例についても紹介する。

アメリカザリガニは、あまりに広く分布し、身近になりすぎたが故に影響が過小評価されてきた典型と言える。低密度化に伴う回復事例から見ても、日本の淡水域に本種が侵入していなければ、現在のような状況にはなっていなかった可能性が高く、少なくともこれ以上の拡散を抑止し、希少種の生息する水域からの早急な排除が望まれる。そのためにも、法的な移動の禁止が必須となっている。行政が手をこまねいている間に、これまで分布していないとされていた、南西諸島の島々に急速に拡散しつつあり、世界遺産を目指す山原地域や八重山諸島への定着も確認されてしまったことも紹介する。